

# 魚見塚遺跡

松江市まちづくり文化財課  
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

## 1. はじめに

松江市では市道西尾大井線道路整備事業に伴い、魚見塚遺跡の発掘調査をおこなっています。狭い調査区ですが、古代道路の一部を良好な状態で検出しました。

律令期の官道である可能性が高いと考えられます。

## 2. 古代道路（官道）とは

律令期には強大な中央集権国家の下、都を中心にして七道駅路（下図）が整備されました。駅路の特徴としては、

- ①直進性が強く指向されている。
- ②幅側溝などにより幅員が視覚的に明示されたものが多い。
- ③幅員が9～12mである。
- ④30里（約16km）ごとに駅家を設置している。

ことなどがあげられます。



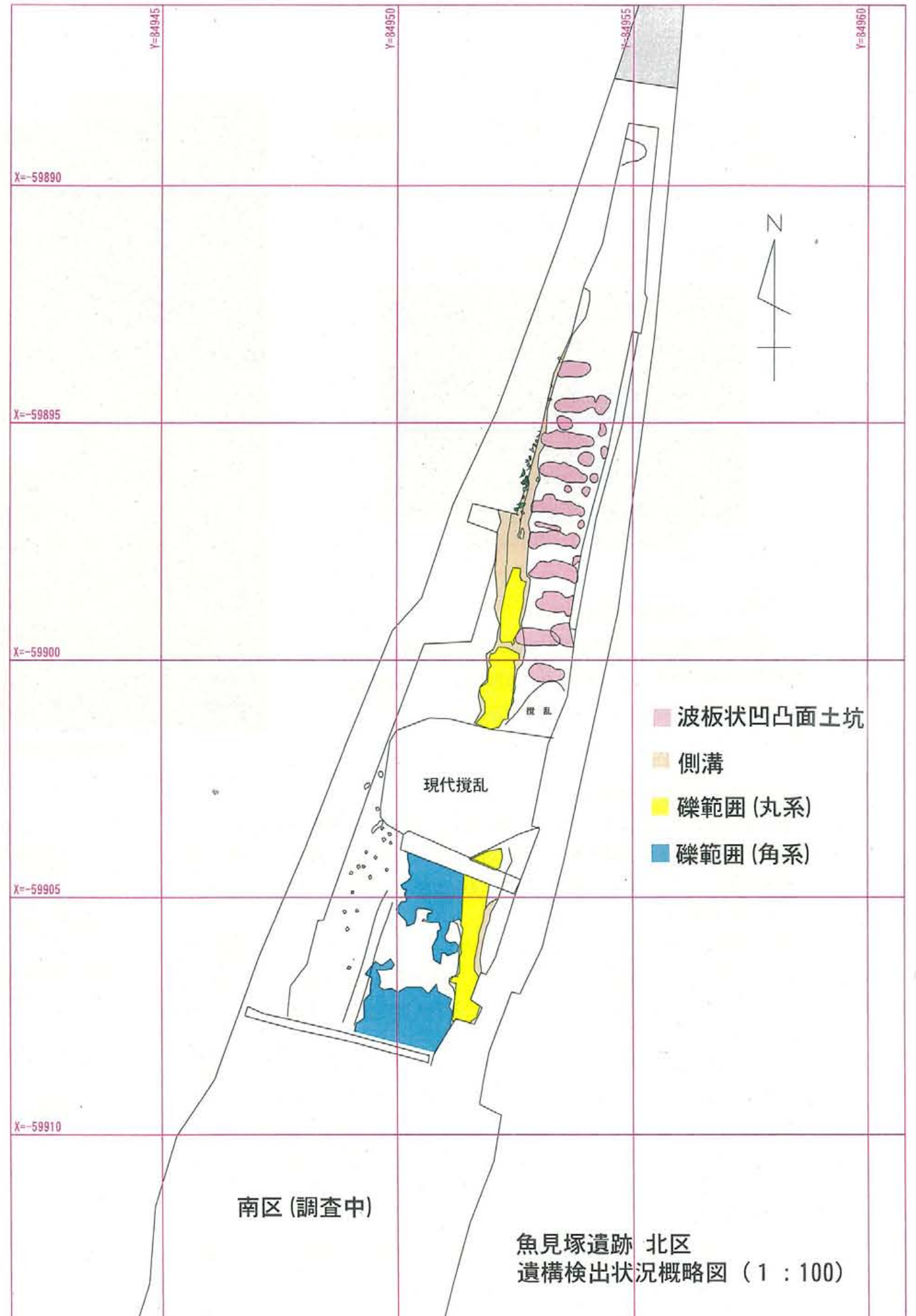
調査地位置図



ビックリ！！  
740年に藤原広嗣の乱が起きましたが、その情報は九州の大宰府から奈良の都（約650km）まで5日で伝わったそうです。  
なお、乱の鎮圧には、山陰道など5道軍1万7千人が徴発されています。

※平安時代の「延喜式」を基に官道の推定位置を示したもの。奈良時代とは異なる部分も多い。

七道駅路と魚見塚遺跡



南区(調査中)

魚見塚遺跡 北区  
遺構検出状況概略図 (1:100)

3. 検出した古代道路について

- ①西側に側溝があります。掘り直しをおこなった痕跡が確認できました。
- ②波板状凹凸面があり、土坑埋土は軟質で、中には複数の石が入られていることがわかりました。
- ③遺物は側溝から奈良時代の土器小片が出土しました。



波板状凹凸面の一部半截状況



北へのびる古代道路

4. 検出した古代道路の性格について

『出雲国風土記』の道度条に記された、隠岐へも続く枉北道推定地で発見されました。南北方向に直線的に走り、時期的にも矛盾がないことから、枉北道である可能性が高いと考えられます。

【出雲国風土記】 道度の条

國の東の場より、西に去くこと二十里一百八十歩にして、野城橋に至る。長さ三十丈七尺、廣さ二丈六尺あり。飯梨河なり。又、西二十一里にして國廳、意宇郡家の北なる十字街に至り、即ち分かれて二つの道となる。一つは正西道、一つは、枉北道なり。

枉北道は、北に去くこと四里二百六十六歩にして、郡の北の場なる朝酌渡に至る。渡り八十歩。渡船一つあり。又、北へ一十一里一百四十歩にして、嶋根郡家に至る。郡家より北に去くこと一十七里一百八十歩にして、隠岐渡、千酌駅家の濱に至る。渡船あり。

又、郡家より西へ…(中略)…秋鹿郡家に至る。又、西へ…(中略)…楯縫郡家に至る。又、西へ…(中略)…にして、出雲郡家の東の邊、即ち正西道に入るなり。

加藤義成校注『出雲国風土記』(昭和40年)より



図1 朝酌郷とその周辺(1918年刊2万分の5千分の1地形図を改変)  
朱点は、駅路の想定ルートで、中村太一「『出雲国風土記』の方位・里程記載と古代道路」(『出雲古代史研究』2.1982年)80頁に依拠した。

5. 今後の課題

現道下の調査を実施する予定です。道路の残存状況、構築方法を観察し、道幅の確定ほかをおこないます。